

星野博美

Hoshino Hiromi

集英社新書ノンフィクション

のまおこ

野馬追で

会いましょう

相馬の馬文化と震災後の日常





# 目次

## 第一章 二〇二一年相馬野馬追

大幅に規模を縮小した野馬追／浪江駅前を練り歩く騎馬武者たち／  
和気あいあいとした沿道／昔と現代の融合／疫病の猛威

## 第二章 標葉郷平本家との出会い

凜とした女の子／立野からの出陣／陣屋にて／馬丁の人たち／  
野馬追とナーダム／ひまわりが咲く頃／野馬懸／上げ野馬の神事／  
野馬追の存在意義

## 第三章 「野馬追の日に会っている」

南相馬再訪／平本さんとの再会／野馬追の日に会っている／  
所属先は個人の選択／高橋さんと殿／「野党」の気骨／三人でトラクターを運ぶ

## 第四章 相馬野馬追保存会

日本の在来馬／消えた日本の馬／保存会の役割／  
時代によって変化し続ける野馬追／馬にまたがる芸者／野馬追の馬／  
富山から相馬へ／相馬と五島の共通点

## 第五章 原発からの逃避行

またもや、「野馬追の日に会っている」／馬のいる暮らし／見よう見真似／  
野馬追の時、「わか」とは喋れない／サムライ・オーラ／  
ユーモアの陰に隠された壮絶さ／乗ったほうが楽だ／  
ウルトラマンの怪獣が通ったあと／「そこにいたらダメだ」／  
できるだけ遠くへ／みんなが入れるところ／被災者に対する微妙な差別／  
馬と住める場所／二回目の人生／野馬追の魅力

## 第六章 「私がやってやる」

ヤギのあお／トルコギキョウとビクトリーブーケ／  
猫のきいー、おもち、みいーみいー／波瀾万丈な半生／山が違う／  
農業との出会い／私がやったらう／令和元年の台風／  
みんなの財産を誰かが守っていく／野馬追に出られるなんて／  
昔を思い出すきっかけにしてほしい／夜の森の桜／  
失った自信を取り戻すための時間

## 第七章 二〇二二年相馬野馬追

陣屋と馬房の距離／騎馬が普通にいる風景／馬丁の重要性／  
街道を埋め尽くす元競走馬の群れ／いよいよ祭りのハイライト／  
浪江に戻って感じた安堵／郷内神旗争奪戦の楽しみ方／  
もうすぐ祭りが終わってしまう／馬九行久（うまくいく）

あとがき

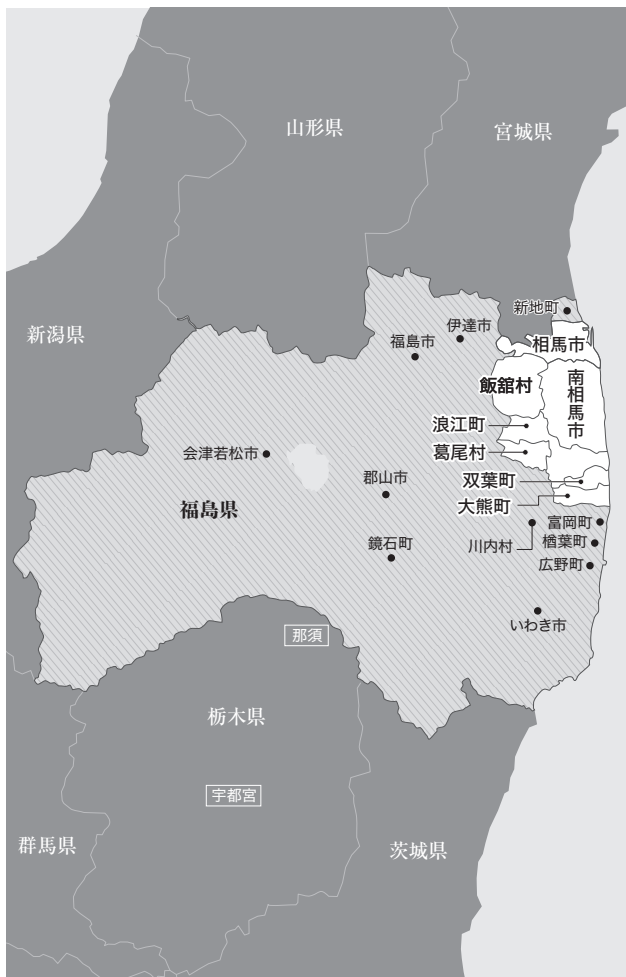
263

主要参考文献・資料

268

写真撮影／星野博美  
地図作成／MOTHER

図表1 本書に登場する主な市町村



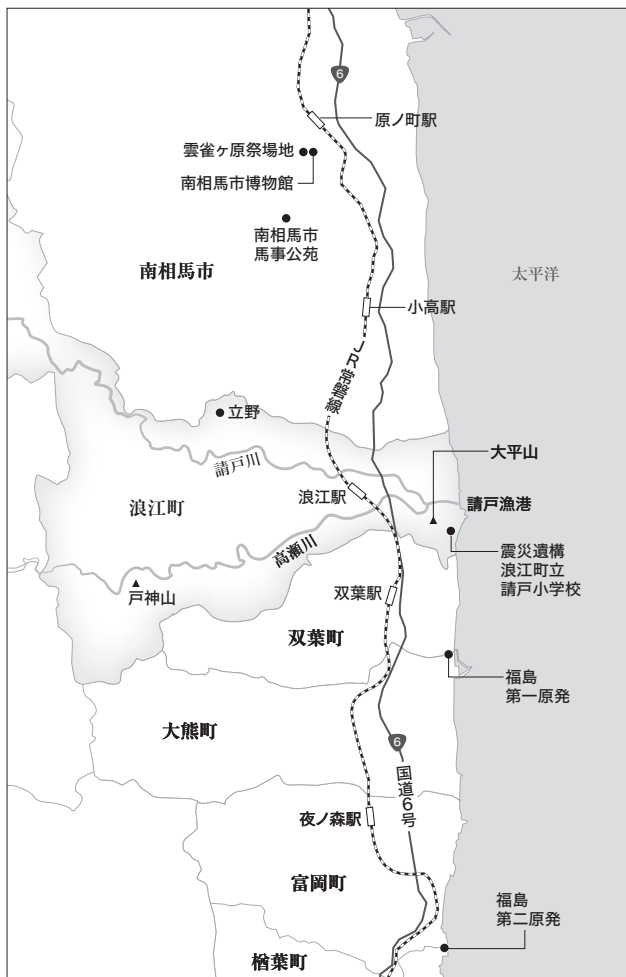
図表2 相馬地方と「郷」



野馬追が行われる地域は、江戸時代の奥州中村藩の領地とおおよそ同じ。当時の区割である「郷」にちなんだ五つの郷に分かれている。

南相馬市博物館編集・発行『野馬追のいまむかしガイドブック』改訂増補版をもとに作成

图表3 浪江町周辺図



図表4 浪江町中心部図



浪江町ホームページ「浪江町施設マップ」をもとに作成

## まえがき

丙午ひのえうま（一九六六年）の生まれということもあり、私は馬が好きだ。

かつて暮らしたことのある香港ホンコンで「馬が好きだ」というと、十中八九、「賭馬ドウマー（競馬）だろ？ 俺も好きだよ！」と言われ、身を乗り出された。私は一時期、香港・新界シヤテイインの沙田競馬場のすぐ近くに住んでいて、競馬のある晩はそちら方向が白い光を放ち、「うおー」という歓声が聞こえたものだった。「違う、騎馬ケイマー（乗馬）だよ」と答えると、相手は途端に興味を失い、次の話題に移った。

香港には、競馬や麻雀マシヤンといった博打ぼくちが大好きな人が多かった。友達と行う麻雀でも、金を賭けなければ「やる意味がない」と彼らは言った。かつての香港には、中国の共産化を嫌ってイチカバチかで密航してきた人とその子孫が多く、要は人生の博打に一発賭けた人たちだった。彼らにとっては、人生の博打に比べたら競馬や麻雀など、かわいい類たぐいの博打に映ったのだろう。ちなみに私は競馬をしない。競馬場に行ったこともあるし、時には競馬中継を見ることがある。

るが、金は賭けない。わが家に「博打禁止令」が出ていたからだ。

うちのファミリーはもともと外房・御宿の鱒漁師で、彼らのはまる博打といえは花札と相場が決まっていた。花札の負けがこんで家屋敷を手放したり、妻子が芸者にさせられたりするケースを間近で見ていた父が、「博打禁止」の家訓を残したのだった。その効力はいまでも続いている。

それはさておき、私と馬との実質的な出会いはとても遅く、四〇代半ば、しかもあまりに唐突で意味不明だった。

二〇一〇年、愛猫の死と人間関係のゴタゴタが重なって破れかぶれになった私は、どこか遠くへ行って脳や体を酷使したくなった。そして自動車免許を取ろうと思ひ立ち、いわゆる合宿免許のために長崎県五島列島の福江島にある「ごとう自動車学校」へ行つた。そこは馬がいるという触れこみの不思議な自動車学校だった。教習コースの優に二倍はありそうな馬場があり、当時は「ごとう」にちなんで五頭の馬とヤギがいた。

なかなか運転が覚えられない私は、高校を卒業したばかりの教習生がどんどん仮免許試験に受かって島をあとにするのを見送る、長老のような立場だった。そんな私を気遣い、校長先生が「星野さんは好きなだけ馬に乗っていい」というお触れを出してくれた。そのおかげで、毎

日馬に乗り、厩舎きゆうしやの掃除の手伝いをした。だから私が乗馬のいろはを習ったのは、自動車学校だったのだ。どう考えてもへんである。

馬と車にほぼ同時に乗り始めたことは、私に不思議な印象を与えた。馬は人格（馬格）のある乗り物だという感覚だ。

人に「乗られる」ようになった馬は、人間との関わりが非常に長い動物である。その土地と時代によって、さまざまな用途で人間に使われてきた。軍事力として、移動手段として、また「馬力」という言葉が示すように、動力として。定住型の農耕民にとっては農耕における貴重な労働力だったし、遊牧騎馬民族にとっては移動手段、軍事力、かつ乳や肉を提供してくれる栄養源でもあった。どこの土地でも、支配層は立派な馬を欲しがり、優れた馬はステイタスシンボルだった。

馬という乗り物に乗って、どこへ行けるだろう？　そこからどんな風景が見えるのだろうか？　それはいつしか旅先の選定にも影響を及ぼし、できるだけ馬のいる場所へ行きたいと思うようになった。

これまで私は海外で、馬のいる場所を訪ねてきた。モンゴル、スペイン、トルコ、そしてキ

ルギス。

モンゴルでは国民的祝祭である「ナーダム」を見た。六歳から一二歳までの子どもによる過酷な長距離草競馬を見て、子どもたちが「ナーダムで勝った」という一生誇れる名誉を競って戦う様子を涙を流した。次に訪れた時は自分も馬で疾走し、平原に突然出現した川を渡りそこねて落馬した。肩を骨折して、完治まで六か月を要するという憂き目に遭った。

スペインのアンダルシアでは、スペインが誇る名馬「アンダルシアン」の雑種に乗り、オリブの巨木が連なる平原を散歩した。

トルコでは、厳寒のカップドキアを溪谷から溪谷へと馬で渡り歩いた（ここでも雪山で一度落馬した）。奇岩が織りなす荘嚴な風景で知られるカップドキアでは、馬房もまた岩をくり抜いて作られていた。かつてキャラバンサライだった場所には、いまも駐車場ならぬ駐馬場が残さず残っていて、そこに馬をつないでお茶を飲んだ。

キルギスでは、標高三〇〇〇メートルを超える山道を、ヤクや羊の群れの間を縫って馬で歩き、山々の奥にある氷河湖を見に行った。町に下りると、普通に馬に乗って買い物しに来ているおじいさんを何人も見かけた。ここでは馬が、本当に乗り物としていまも活用されていた。

海外で馬を訪ねた旅については、二〇二四年に刊行した『馬の惑星』にたっぷり書いている

ので、併せて読んでいただけたら嬉しい。

これらの場所を訪れるうち、馬のいる暮らしについて考えさせられるようになった。

日本の馬文化はどのようなのだろうか、と思わざるをえなかった。

いまの日本で、車窓から馬が草を食む風景を見かけたり、おじいさんが市場へ馬で買い物に行くのに出くわしたりすることは、ほほえないと言っている。

しかし競馬産業は好調で、競争馬や騎手の話題には事欠かない。かなりいびつな状況であることは素人目にも明らかだ。

日本ではどんな場所で馬と関わる文化が残っているのだろうか。新型コロナウイルスの感染拡大でしばらく海外へ出ることができなくなった事情もあり、自分が暮らす日本における馬文化のありようが気になり始めた。

日本で馬、といえば、真つ先に思い浮かべたのは「相馬野馬追」だ。

相馬野馬追は、いまから一〇〇〇年以上も前、相馬氏の遠祖とされる平将門が、下総国小金ヶ原（現在の千葉県北西部）の牧に野生の馬を放牧し、それを敵兵に見立てて追い、馬を捕らえる軍事訓練として始まった、と伝えられる。その後、元亨三年（一三三三年）、相馬氏が陸

奥国行方郡（つのくになめかた）（現在の福島県南相馬市、相馬郡飯館村（いいたた））に移ってからも、代々の領主がこの行事を伝承し、相馬地方の平和と安寧を祈る神事として続けられてきた。七月最終週の土・日・月に開催され（二〇二四年からは五月最終週の土・日・月に変更して開催）、多くの観光客が訪れる。国の重要無形民俗文化財にも指定されている。

私が初めて相馬野馬追の存在を知ったのは、東日本大震災からまだ日も浅い頃のことだった。野馬追が行われる地域は、津波と原発事故で甚大な被害を受け、人だけでなく、祭りに参加する馬も多くが被災した。それでも二〇一一年七月、規模を大幅に縮小して野馬追が開催される、という報道があり、それをきっかけに存在を知った。

馬とともに生きる人々の暮らしが日本から消えてゆくなか、よりによって、その伝統が残る数少ない地域である相馬地方が被災した。その痛みを、野馬追のニュースに教えられたのだ。た。

それ以来、いつかは行ってみたい、と思いつながら、被災地を物見遊山で訪れることにどことなく引け目を感じ、延ばし延ばしになっていた。

二〇二〇年、今年こそ行こうと、ようやく重い腰を上げたものの、新型コロナウイルス感染拡大のため、神事を中心とした最小規模での開催となり、残念ながら見ることはできなかった。

二〇二一年は何か何でも、という思いで春頃から情報収集を始め、取材許可証も申請することにした。

相馬野馬追から、どんな日本が、そして日本における馬文化が見えてくるのだろうか。

二〇二一年夏、私は福島県浪江町なみえまちへ向かった。